

使徒 12 : 1-13 : 3

「教会に対する暴力、しかし神は祈りに答えてくださる。」

12:1 そのころ、ヘロデ王は、教会の中のある人々を苦しめようとして、その手を伸ばし、

12:2 ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した。

12:3 それがユダヤ人の気に入ったのを見て、次にはペテロをも捕らえにかかった。それは、種なしパンの祝いの時期であった。

12:4 ヘロデはペテロを捕らえて牢に入れ、四人一組の兵士四組に引き渡して監視させた。それは、過越の祭りの後に、民の前に引き出す考えであったからである。

12:5 こうしてペテロは牢に閉じ込められていた。教会は彼のために、神に熱心に祈り続けていた。

12:6 ところでヘロデが彼を引き出そうとしていた日の前夜、ペテロは二本の鎖につながれてふたりの兵士の間で寝ており、戸口には番兵たちが牢を監視していた。

12:7 すると突然、主の御使いが現れ、光が牢を照らした。御使いはペテロのわき腹をたたいて彼を起こし、「急いで立ち上がりなさい」と言った。すると、鎖が彼の手から落ちた。

12:8 そして御使いが、「帯を締めて、くつをはきなさい」と言うので、彼はそのとおりにした。すると、「上着を着て、私について来なさい」と言った。

12:9 そこで、外に出て、御使いについて行った。彼には御使いのしている事が現実の事だとはわからず、幻を見ているのだと思われた。

12:10 彼らが、第一、第二の衛所を通り、町に通じる鉄の門まで来ると、門がひとりでに開いた。そこで、彼らは外に出て、ある通りを進んで行くと、御使いは、たちまち彼を離れた。

12:11 そのとき、ペテロは我に返って言った。「今、確かにわかった。主は御使いを遣わして、ヘロデの手から、また、ユダヤ人たちが待ち構えていたすべての災いから、私を救い出してくださったのだ。」

12:12 こうとわかったので、ペテロは、マルコと呼ばれているヨハネの母マリヤの家へ行った。そこには大ぜいの人が集まって、祈っていた。

12:13 彼が入口の戸をたたくと、ロダという女中が応対に出て来た。

12:14 ところが、ペテロの声だとわかると、喜びのあまり門をあけもしないで、奥へ駆け込み、ペテロが門の外に立っていることをみなに知らせた。

12:15 彼らは、「あなたは気が狂っているのだ」と言ったが、彼女はほんとうだと言い張った。そこで彼らは、「それは彼の御使いだ」と言っていた。

12:16 しかし、ペテロはたたき続けていた。彼らが門をあけると、そこにペテロがいたので、非常に驚いた。

12:17 しかし彼は、手ぶりで彼らを静かにさせ、主がどのようにして牢から救い出してくださったかを、彼らに話して聞かせた。それから、「このことをヤコブと兄弟たちに知らせてください」と言って、ほかの所へ出て行った。

12:18 さて、朝になると、ペテロはどうなったのかと、兵士たちの間に大騒ぎが起こった。

12:19 ヘロデは彼を捜したが見つけることができないので、番兵たちを取り調べ、彼らを処刑するように命じ、そして、ユダヤからカイザリヤに下って行って、そこに滞在した。

12:20 さて、ヘロデはツロとシドンの人々に対して強い敵意を抱いていた。そこで彼らはみなでそろって彼をたずね、王の侍従ブラストに取り入って和解を求めた。その地方は王の国から食糧を得ていたからである。

12:21 定められた日に、ヘロデは王服を着けて、王座に着き、彼らに向かって演説を始めた。

12:22 そこで民衆は、「神の声だ。人間の声ではない」と叫び続けた。

12:23 するとたちまち、主の使いがヘロデを打った。ヘロデが神に栄光を帰さなかったからである。彼は虫にかまれて息が絶えた。

12:24 主のみことばは、ますます盛んになり、広まって行った。

12:25 任務を果たしたバルナバとサウロは、マルコと呼ばれるヨハネを連れて、エルサレムから帰って来た。

13:1 さて、アンテオケには、そこにある教会に、バルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、クレネ人ルキオ、国主ヘロデの乳兄弟マナエン、サウロなどという預言者や教師がいた。

13:2 彼らが主を礼拝し、断食をしていると、聖霊が、「バルナバとサウロをわたしのために聖別して、わたしが召した任務につかせなさい」と言われた。

13:3 そこで彼らは、断食と祈りをして、ふたりの上に手を置いてから、送り出した。

はじめに

使徒 12 章から 13 章 3 節までで、使徒の働き第一部が完結します。

使徒の働きの残りの部分には、おもに使徒パウロの宣教旅行について記されています。パウロの宣教旅行に関する記述もとても重要です。私たち自身の福音宣教の土台を与えてくれますし、困難に見舞われてもイエスに仕え続ける励みとなるからです。

聖霊の力によって福音のメッセージを告げ知らせたり、自身の信仰の証を分かち合ったりするとき、必ずそれに対する抵抗が起こります。イエスとの信仰の旅路をひとりの信徒として進むときも、妨害があります。

それは、敵である悪魔はすでに負けが決まっていますが、針のないハチのような存在だからです。私たちがイエスをとおしていただいた永遠の救いを揺るがすことはできなくても、あらゆる問題を引き起こします。

クリスチャンが殺されて、サタンが勝利を収めたように見えても、物事の最終決定権は神にあります。

神はご自身のときにすべてをさばかれます。

神はご自身の民の命についても主権をお持ちで、神のみこころに従って信徒を守られます。

この個所を学ぶにあたって、この真実は大きな励ましです。

今日の個所は、4 つに分けて学びましょう。

12 : 1-4 では、ヘロデ王による信徒への暴挙が記されています。

12 : 5-19 では、御使いを用いて神が働かれて、ペテロは守られ、牢獄から解放されます。

12 : 20-24 では、神がヘロデをさばかれます。

12 : 24-13 : 3 では、聖霊による神の働きが継続し、各地に福音を携えて行くためにふたりの宣教師が派遣されます。このふたりは、バルナバとサウロです。

1. イエス・キリストを信じる信徒に対するヘロデ王の暴挙 (12 : 1-4)

ステパノの殉教 (使徒 7 : 54-8 : 3) をきっかけに起こった迫害は、エルサレムのクリスチャンにはそれほど及ばなかったと聖書は語ります。

使徒パウロは命の危険にさらされながらも (使徒 9 : 29)、エルサレムで自由に行動できました。

迫害が起こってから、少なくとも 2 年間、比較的平穏な日々がありました。

ここで、ヘロデ王の登場です。

この非道な人物は誰でしょう。

彼の名は、ヘロデ・アグリッパ 1 世です。

(使徒 25 : 13 に登場するのは、ヘロデ・アグリッパ 2 世で、後の人物です。)

ヘロデ・アグリッパ 1 世は、ヘロデ大王の孫です。

おじのアンティパスはイエスと会ったことがあり、あらゆる質問をしました。(マタイ 2 : 1)

イエスとイエスの弟子たちは、ヘロデ王のよく知る存在でした。

彼にはマリムネというユダヤ人の祖母がおり、この祖母が彼にローマで教育を受けさせました。

祖母マリムネがいることで、彼はユダヤ人の血統を主張することができました。

そして、そのユダヤ人の血統を大いに利用し、あらゆる手段でユダヤ人に取り入りました。

イエスを救い主だと信じなかったユダヤ人は、このヘロデ王をたたえました。彼は宮での礼拝や旧約聖書の公衆朗読にもかかわったからです。

この王についてのおおまかな背景を知っておくことは大切です。3 節に「それがユダヤ人の気に入ったのを見て、…」とありますが、その後の彼の行動を理解する上で、この背景が役立ちます。

ヘロデ・アグリッパ王は、大変な野心家で、祖父のような絶大な権力を求めていました。

ローマ帝国のあらゆる地域をすでに支配していましたが、それに加えてユダヤおよびサマリヤ地方の統治権も求め、与えられました。

彼は、それら新しい地域の統治権を引き継ぐと、自らの権力を誇示しようとしていました。

まず行ったのが、クリスチャンに対する迫害です。

彼は、ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺しました。

このヤコブとはどんな人物でしょうか。

ヤコブは優秀な弟子で、イエスに従う人々の中心人物のひとりでした。エルサレム教会の重要人物で、おそらく指導者だったと思われます。それでヘロデは最初に彼を殺したのでしょうか。

この出来事が起こったのは、ユダヤ人の過越祭のころです。

多くのユダヤ人が大切な祭事を祝うためにエルサレムに集まっていました。そして、ヤコブが殺されたことはユダヤ人の気に入った、とあります。それで、アグリッパ王は続いてペテロを捕らえて牢に入れました。彼はペテロを訴えるつもりでしたが、法廷に出すのを過越祭の後まで先送りしていました。ユダヤの律法では、過越祭の期間中には裁判を開いたり判決を言い渡したりすることができなかつたからです。けれども、裁判を待つ間、被疑者を牢に拘束することは許されていました。ペテロは牢に入れられ、16 人もの兵士が監視役として配置されました。脱獄があった場合、監視していたローマ帝国の兵士たちは処刑されるので、彼らは用心深く見張っていたことでしょう。(19 節)

こうして、アグリッパ王はご満悦でした。エルサレム教会の指導者を処刑し、一番の伝道者を牢に入れて、裁判と処刑を待つばかりとしていたのです。

この状況で、神はどうなさるでしょう。信徒たちはどうするでしょう。彼らはどうやってペテロを助けることができるのでしょうか。アグリッパ王という偉大な権力者を前に、エルサレム教会に希望はあるのでしょうか。これらの問いの答えは、続きの聖書個所に記されています。

2. 御使いをとおして神が祈りに答えて働かれる。(5-19 節)

ペテロが出廷する前夜のことでした。ペテロが逮捕されてから、教会の人々はペテロのためにずっと祈っていました。

イエスを信じる信徒に与えられた最強の武器は、「祈り」です。後の適用部分でこのことについてもう少しお話しますが、背景を踏まえて 5 節に注目することが大切です。

原語のギリシャ語では、5 節は、継続的な祈りであることをとくに強調しています。今日の聖書個所の前後関係から、ペテロの出廷前夜は徹夜の祈祷会が開かれていたことがわかります。

エルサレム教会の人々は、ヨハネの母マリヤの家で一晩中祈っていたのです。ペテロは疲れて、牢の中で寝ていました。彼はふたりの兵士に鎖でつながれ、牢の内側にも外側にも監視役がいました。

脱走できる状態ではまったくありません。それは不可能です。

けれども、不可能な状況は、自然を超越した神に不可能なことを成していただくチャンスです。神は、神を信じる人々の祈りに見事に答えてくださり、御使いを送ってペテロを牢から助け出されました。

ペテロは幻を見ているのだらうと思っていたので、実際に何が起きているかわかっていませんでした。

ただ御使いに従って行動したのです。ペテロがついに安全な場所までたどり着くと、御使いはペテロのもとを離れました。このときやっとペテロは目覚めて、神が御使いを遣わして牢から助け出してくださったことを知りました。ヘロデやユダヤ人によって処刑されるかもしれない状況から救われたのです。

ペテロは、このことを報告するために、ヨハネ・マルコの家に行くことにしました。そして、ヨハネ・マルコの家の玄関の門をたたくと、ロダという女中が応対しました。ロダはペテロの声に気づいて、喜びのあまり、施錠されていた玄関の門を開けるのを忘れて中に入りました。ロダは徹夜祈祷会をしていた人々に、祈りが答えられてペテロが来たと言いました。

けれども、そこにいた人たちは、彼女の言葉を信じませんでした。ペテロが戸を叩き続けるので、ついに彼らは戸を開けました。そしてペテロがそこに立っているのを見ました。ペテロは牢で起こったことを彼らに話し、他の場所へ行きました。

朝になって、ヘロデはペテロが逃げたことを知りました。どこを探してもペテロは見つかりません。兵士たちは務めを怠ったとして処刑されました。これは、囚人を監視する兵士にかかわるローマ帝国の厳しい法律です。

16 人のローマ兵は処刑されましたが、ペテロは牢を脱出し、どこかに身を隠しました。

適用

この個所から皆さんにお伝えしたい適用は、祈りについてです。

ロダという女中は声でペテロだとわかりましたが、徹夜祈祷会に参加していた信徒たちは信じませんでした。

徹夜の祈祷会にいた人たちが信仰をもって祈っていなかったことは明らかです。

祈りについて3つ大切なことがあります。私たち自身が日々の祈りを続けようという気持ちを維持するために、このことを理解する必要があります。

- a) 信仰をもって祈らなければならない。
- b) 神の約束を信じて祈らなければならない。
- c) 神の主権を信じて祈らなければならない。

まず、信仰による祈りについて考えましょう。

その前に、「信仰」という言葉の意味を理解する必要があります。

ヘブル 11 : 1-7

11:1 信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。

11:2 昔の人々はこの信仰によって称賛されました。

11:3 信仰によって、私たちは、この世界が神のことばで造られたことを悟り、したがって、見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟るのです。

11:4 信仰によって、アベルはカインよりもすぐれたいけにえを神にささげ、そのいけにえによって彼が義人であることの証明を得ました。神が、彼のささげ物を良いささげ物だとあかししてくださったからです。彼は死にましたが、その信仰によって、今もなお語っています。

11:5 信仰によって、エノクは死を見ることのないように移されました。神に移されて、見えなくなりました。移される前に、彼は神に喜ばれていることが、あかしされていました。

11:6 信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならないのです。

11:7 信仰によって、ノアは、まだ見ていない事がらについて神から警告を受けたとき、恐れかしこんで、その家族の救いのために箱舟を造り、その箱舟によって、世の罪を定め、信仰による義を相続する者となりました。

ですから、信仰をもって祈るには、目に見えなくても聖書の神が実在されると信じることと、心からこのお方に願い求めることが必要です。

信仰をもって祈る時、私たちは聖書の神に確信を置いています。神に愛されていること、神が祈りに答えてくださることを疑いはしません。

次に、神の約束を信じて祈らなければなりません。

聖書が禁じることを求めて神に祈っても無駄です。また、聖書の中で約束が与えられた場面では、その背景を理解するのも大切です。

例を挙げて話しましょう。

ピリピ 4 : 19

4:19 また、私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たして下さいます。

パウロはピリピの教会に、神がキリスト・イエスにあるご自身の栄光と富をもって彼らのすべての必要を満たして下さると言いました。

この教会の人々は、犠牲を払って使徒パウロのためにささげました。そういうわけで、彼らの必要は満たされるのです。

私たちが正直に心からささげていけば、神は私たちの必要を満たして下さいます。つまり、礼拝をささげている教会に什一献金をささげ、それ以外にも、神のしもべをとおしてなされる働きのために必要に応じてささげているということです。

私たちは信仰をもって祈ることができます。私たちが心から犠牲を払ってささげているなら、神が必要を満たして下さるといふ約束を信頼して祈れます。

第三に、私たちは神の主権を信じて祈らなければなりません。

これはどういう意味でしょう。

神はすべてにおいて私たちよりもよくご存知です。神が、今すぐ答えよう、とおっしゃる場合もあれば、もう少し待ちなさい、今は時ではない、とおっしゃる場合もあります。また、それはだめだ、あなたにとっての最善ではない、とおっしゃることもあります。それは、神が未来までお見通しで、私たちに対するみこころをいつもご存知だからです。

つまり、神は私たちを愛しておられるので、私たちにとっての最善を常になされるということです。そのとき、私たちにはその答えが理解できなかったとしても、です。

神に「ノー」の答えをいただいても、私たちにとってそれが常に最善なのです。

私は 1992 年に日本を離れました。神は私たち夫婦に、いつか再び日本へ連れ帰ると約束してくださいました。私たちが英国に帰国したのは、1 年間の宣教報告のためでした。

けれども、神は、私たちが日本に戻る扉を閉ざされました。私は祈りましたが、神の答えは「ノー」でした。

しかし 23 年後、神は私たち夫婦に OIC での 5 年間の働きというかたちで日本に戻る扉を開いてくださいました。

今振り返ると、23 年前に神が「ノー」と言われたことを感謝していると心から言えます。

私たちは、これらのことを理解し、この原則を日々の祈りに当てはめます。

そうすれば、今日の個所で、祈禱会に参加していても神が不可能なことをしてくださったと信じられなかった人々のようではなく、玄関にいるのはペテロだと信じたロダのようになれるでしょう。

3. ヘロデに神のさばきがくだる。(20-23 節)

はっきりどれくらい後かはわかりませんが、後日ヘロデにさばきがくだったことをルカは記録しています。ヘロデは自らをまるで神のようにまつりあげていたようです。そして、人々はヘロデを人間としてではなく神とたたえました。

すると突然、主の御使いが彼を打ち、ヘロデは死んでしまいました。

死因は、虫にかまれたことだとあります。

ヘロデは極悪なことを行いましたが、彼の最後の罪は、神の栄光を自分のものとしたことです。

適用

神が私たちの人生になしてくださったことを、自分の功績にするのは非常に危険な行為です。

神はご自身の栄光を誰にも与えられません。

イザヤ書 42 : 8

42:8 わたしは【主】、これがわたしの名。わたしの栄光を他の者に、わたしの栄誉を刻んだ像どもに与えはしない。

世の中には悪人がたくさんいます。

自らを神とする独裁者や支配者が多数います。

けれども、神はいずれその者たちをさばかれます。そして、彼らが受けるのは、地獄での永遠の罰です。永遠に神と引き離されるのです。

皆さんは、そのような人たちと地獄に行かないようにしてください。イエスを信じましょう。

イエスが罪を取り去ってくださいと信じ、日本の偶像ではなく、聖書の神を信じましょう。

4. 神の働きが継続する。サウロとバルナバが神の働きのために聖別される。(12 : 24-13 : 3)

24 節には励まされます。偉大な権力者をもってしても、神のみことばが広まるのを阻止することはできませんでした。また、イエスが救い主であり主であると人々が信じるのを止めることもできませんでした。

信徒たちは迫害を受ける可能性があることに落胆せず、天国に行ける確信によって励まされました。

アンテオケの教会で、断食と祈りの時が持たれました。

彼らが断食と祈りをしていたときに、バルナバとサウロを神に召された特別な働きのために聖別するようと、聖霊が教会指導者たちに語られました。指導者たちはさらに断食と祈りをして、彼らを第一回目の宣教旅行へと送り出しました。

適用

ここで見逃してはいけない適用がひとつあります。それは落胆することについてです。サウロとバルナバは、ヤコブが死んだことも、ペテロが捕えられたことも知っていました。

そして、今後の働きで迫害や困難に必ず遭うこともわかっていました。

それでも、祈りと断食の後、彼らは神に従い、福音を告げ知らせる働きへと出かけました。

彼らは人にされることを恐れて落胆するのではなく、神がなしてくださることに期待して力づけられました。

私は、今年引退することになった伝道者のインタビュー記事を読みました。

トレバー・マッシュズという人で、私も個人的に知り合いです。

彼は、英国でもおもに北アイルランドで 40 年以上神に仕えてきた人です。

インタビューの中で、次のような質問がされました。

「クリスチャンとしての働きをこれから始める若き伝道者たちに何かアドバイスはありますか。」

彼はこう答えています。

「失われた人々（ノンクリスチャン）に対して優しい心が持てるように神に求めなさい。詩篇 126 : 5『涙とともに種を蒔く者は、喜び叫びながら刈り取ろう。』というみことばに深く思いをめぐらせなさい。豊かなデボーションの時間を持ち続けなさい。伝道する相手のことを理解するために、あらゆるジャンルの書物を読みなさい。そして、どんな落胆の原因もはねのけなさい。」

すべて良いアドバイスですが、最後の言葉を読んで、落胆しているクリスチャンの働き人のために祈るよう促されました。

落胆は、神に仕えるすべてのクリスチャンが経験しますが、これをはねのけなくてはなりません。

聖書は、「悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。」と語ります。（ヤコブ 4 : 7）

今日最後に皆さんにお勧めします。信仰をもって祈りましょう。神の約束と神の主権を信じて祈りましょう。落胆する気持ちをはねのけ、失われた世の中に福音を携えるという働きをしっかりとやりましょう。最後には、神がすべての人をさばかれるのです。ですから、罪がイエスによってすでに取り扱われている状態にしておきましょう。

罪赦され、神と正しい関係にあることを確実にしておきましょう。